

『解体新書』の原著者クルムスについての研究

石田 純郎

日本医史学雑誌第四十八巻第一号 平成十二年八月二十三日受付
 平成十四年三月二十日発行 平成十三年十月二十日受理

〔要旨〕安永三年（一七七四）に江戸で翻訳出版された『解体新書』の原著は、まずJ・A・クルムスにより、『Anatomische Tabellen（解剖学表）』として一七二二年にドイツ語でダンチツヒで刊行された。筆者はグダンスク（ダンチツヒ）の公文書館でクルムスに関する史料「故Jo. Ad. クルムス博士の手稿からの抜粋」を発掘した。ギムナジウムの記録簿に挿入されていた六頁の書類で、まずクルムス自身により記録され、没後ギムナジウムの職員が転記したものである。この史料により、当時のギムナジウムの様子が判明する。彼は八・九年生に医学を、六・七年生に自然学を教えた。またこの書類には、当時のギムナジウムの時間割りも記録されている。

キーワード——『解体新書』、『解剖学表』、J・A・クルムス、「故Jo. Ad. クルムス博士の手稿からの抜粋」、ダンチツヒ・ギムナジウム

一、『解体新書』の出版

安永三年（一七七四）に杉田玄白と前野良沢らは『解体新書』を江戸で翻訳出版した。明和八年（一七七二）三月四日、江戸小塚原で女の刑死体の解剖が行なわれた。玄白と良沢は他の医師たちと共にそれを見学した。二人はそれぞれ一冊のオランダ語の解剖書を持参していたが、その本は同じ本の同じ版であった。死体と比較した結果、二人はこの本の挿図の正確さに驚いた。そして三年の歳月をかけてその翻訳を完成させた。

『解体新書』の原書は、まずJ・A・クルムス（Johann Adam Kulmus, 1689-1745）の著、'Anatomische Tabellen（『解剖学表』）'として一七二二年にドイツ語でダンチッヒで刊行された。G・ディクテン（Gerrit Dieten, 1696頃-1770）によりこの本の第三版（一七三二年刊）が一七三四年にオランダ語に翻訳され、'Ontleedkundige Tafelen（『解剖学表』）'としてライデンで刊行された。この本の日本語への重訳が『解体新書』である。

一、研究方法

まず先行研究について検討する。三章で日本とヨーロッパで、先行する研究者がこの解剖書（『解体新書』）とその原著者クルムスについて、どこまで明らかにしているのか、概観する。

次いで、四章以下でポーランドで入手したクルムスについての一次史料と文献を検討する。数年前までポーランドは社会主義国であった。社会主義国における情報開示の少なさのため、外国人が歴史上の史料を調査することは事実上、不可能な状態であった。ところが東欧革命の結果、ポーランドは資本主義国となり、情報の開示が西欧諸国と同様に行なわれるようになり、外国人による史料の調査が容易になった。

そこで筆者は一九九六年の五月と十月にポーランドのグダンスクに調査に赴き、国立グダンスク公文書館（Archiwum

Panstwowe) とポーランド・アカデミー・グダンスク図書館 (Biblioteka Gdanska PAN) など、で史料の調査と入手を試みた。その結果、クルムスに関する一次史料と文献の入手に成功した。

三、クルムスに関する先行研究

まず日本語によって書かれた論文を検討する。比較的詳しくクルムスを論じたのは、呉秀三と小川鼎三であるが、いずれもその主な典拠は、A. Hirsch 編の 'Biographisches Lexikon des Hervorragenden Aerzte Aller Zeiten und Völker' (一八九六年刊) 三巻五七一頁の記事 (④に翻訳を示す) のようである。両人の論じる内容は、基本的に A. Hirsch の記載を越えるものではない。

① 岩熊哲著『解体新書を中心とした書誌学的検討』 米山千代子 福岡 一九四三年

この本の第一頁に、「原著者 Johann Adam Kulmus (1689-1745) の知られている限りの生涯については、呉秀三博士が「解体新書の原著並びに解体新書に引用せる諸の原書の著者」(中外医事新報一〇五六号(筆者註:一一五五号の誤り))なる一文で詳しく紹介して居られるから、贅する必要はない。ここでは成るべく重複をさけて呉先生が述べられなかった事項を論じたい」とある。

そして引き続き、一三頁に、「クルムスの泰西解剖学史上における地位は甚だ低い。普通の西洋医学史の中には、彼の名を見出すことは出来ぬ。彼について知ろうとすれば、特殊の書を漁らなければならない。之に反して、わが医学史上におけるクルムス解剖図譜の地位はほとんど絶対である」と記されており、この指摘は的をえている。

この特殊な書は史料を意味しているものであろうが、半世紀後の現在も、岩熊哲が指摘した状況とさほど変わるものではない。

② 呉秀三著「解体新書の原著並びに解体新書に引用せる諸の原書の著者」『中外医事新報』一一五五号 六四〜七

五頁 一九二五年

①の岩熊哲の書に言及されていた先行研究である。その六六〜六八頁に下記のような記載がある。戦前の日本語での論考の中で、もっとも詳しくクルムスを紹介したものであろう。

[Johann Adam Kulmus (1689-1745) は、西暦一六八九年三月一日プレスラウで誕生した人で同地のギムナジウムに入りて最初の学問をし、それからダンチヒのギムナジウムに転校して、その後一七一年から一七一五年まで、ハルレー、ライプツヒ、ストラースブルグ等二、三の大学で、医学、万有学を修学して、それからバーゼルに行つて、一七一五年にドクトルの学位を得、一時オランダに行き、ドイツの諸地方を旅行して、一七二五年に実兄ヨハン・ゲオルグ・クルムスがダンチヒに居てポーランド王の侍医をして居たところに行つて、実地開業をして居たが、同地の高等学校の医学・万有学の教授に任命されたが、それより前一七二二年からレオポルドアカデミーの会員になつて居た。奇形に關した数多の実験を数種の手記とともに其の会に提供し、又プレスラウの「医学者の論文集」にも公にしたものがある。一七二五年以後はベルリンの科学アカデミーの会員として種々の論文を発表した。一七四五年五月二九日ダンチヒで死亡した。享年五七、此人の著述には医者に取つて非常に必要なものと思われるもの他、万有学・医学又外科学に關したものが沢山あるけれども、此人を最も有名にした著述は一七二五年の出版で、解体新書の原本になつた、独逸語で公になり、ラテン語に訳されたという銅版画入りの Anatomische Tabellen, nebst dazu gehörigen Anmerkungen und Kupfern, daraus des ganzen menschlichen Körpers Beschaffenheit und Nutzen deutlich zu sehen, welche den Anfängern der Anatomie zu bequemerer Anleitung verfasst bei Danzig, 1725 ㄱ オクターフで、二八図表があつて、図表があつては説明があり、説明があつては図表がある、表題通り初学者の手引きに都合のよいものである。」

なお、上記原著表題中にはドイツ語としては不自然な表記が散見されるが、呉論文の記載をそのまま踏襲した。

③小川鼎三の一連の研究（一九五五〜七五年）

一九五五年に刊行された『明治前日本医学史 第一巻』（日本学士院編、東京）で、小川は下記のように著している。「解体新書の本文はクルムス解剖書（独逸ダンチッヒの自然科学者 Johann Adam Kulmus (1689-1744) の著した Anatomische Tabellen の第三版（一七三二）を和蘭の医者 Gerardus Dichten が翻訳したものと Onleedkundige Tafelen と題し、一七三四年アムステルダムにて出版）の本文の大体に忠実な逐字訳であり、創業の人々がよくもこれだけできたものと感嘆の他はない。尤もクルムス解剖書では本文以外の註釈の部分が重要な一部をなすが、これは解体新書には載っていない。」（二二二頁）

記載はこれだけにとどまり、クルムスやディクテンの学歴や業績に関する記述は認められない。

小川は一九六八年には『解体新書 蘭学をおこした人々』（中央公論社、東京）を公刊する。その七四頁から七六頁にかけてクルムスの履歴が記載されている。それによると「彼（筆者註、クルムス）の生涯について詳しい伝記は知られていない。一六八九年三月一八日にプレスラウ（いまポーランド領の Wroclaw）に生れて、ギムナジウムの教育をプレスラウとダンチッヒ（いまポーランド領の Gdansk）でうけたのち、一七一一年から数年間、ハルレ・ライプチッヒ・ストラスブルグ・バーゼルの諸大学で学び、医学と博物学を身につけた。ドクトルの学位を一七一九年バーゼルで得た。ついでオランダに滞在したあと、ダンチッヒにゆき、そこで医業を開いた。彼の実兄ヨハン・ゲオルグ・クルムスはポーランド王の侍医で、ダンチッヒに住んでいたことは、彼がこの地に来たのと関係がありそうだ。一七二五年に、彼ヨハン・アダム・クルムスはダンチッヒのギムナジウムの教授となり、医学と博物学を受けもった。彼が学問的にもっとも活躍したのは一七二〇年代で、年齢では三〇歳から四〇歳までの壮年期であった。彼の有名な『簡明解剖書』（原名 Anatomische Tabellen）の初版は一七二二年ダンチッヒで出された。その他の著作としては『自然哲学要綱』Elementa philosophiae naturalis が一七二二年と二七年、奇形胎児の解剖生理学的な記載が一七二四年、「聴覚について」と「血液循環」が同じく一七二四年、「蒸気と霞」が二六年、「岩石」が二七年、「嗅覚」と「視覚」が二八年、「触角」が二八

年、同じく一七二九年には「動物の発生について」と「昆虫の実験」を発表している。(中略)一七二二年に彼はレオポルド・アカデミーの会員となり、一七二五年以後はベルリン学士院の会員になったというので、彼の学問上の業績は当時かなり認められていたと思う。(中略)

最後までギムナジウムの先生であったかどうか明らかでないが、クルムスは一七四五年五月二九日ダンチッヒで没した。享年五六歳である。クルムス解剖書の書誌学的な考察は、日本では岩熊哲氏により昭和一八年に発表されているが、いま調べるとそれにも若干訂正すべき個所があるようである」とあり、上記した①の岩熊哲の研究がそれまでの主要な書誌学的研究の一つであったと評価する。

小川鼎三の文章は、A. Hirsch 編 'Biographisches Lexikon des Hervorragenden Aerzte Aller Zeiten und Völker' (一八九六年刊) 三卷五七一頁の記事に、上記②の文献からの引用を含み、その上若干他からの引用を加えたものである。「聴覚について」、「血液循環」、「蒸気と霞」、「砒石」、「嗅覚」、「視覚」、「触角」、「動物の発生について」および「昆虫の実験」が、実際は同一書籍に収載された論文であったことについては、六章でそれを指摘した。

小川鼎三は『日本医学雑誌』二二巻二号の四六〜五二頁に「解体新書について」を発表しているが、その四八頁に記述されたクルムスに関する内容はごく簡単で、『解体新書 蘭学をおこした人々』を越えるものではない。

④ A. Hirsch 編の医学者人名事典 'Biographisches Lexikon des Hervorragenden Aerzte Aller Zeiten und Völker' の記載

一八九六年にドイツで刊行された A. Hirsch 編の医学者人名事典 'Biographisches Lexikon des Hervorragenden Aerzte Aller Zeiten und Völker' は、今までに欧米で刊行された医学者人名事典中、もっとも詳細な内容の事典であるが、この本が唯一クルムスの名前を収載している医学者人名事典である。その内容の全訳を示す。

クルムス、ヨーハン、アーダム、ダンチッヒの。一六八九年三月一八日プレスラウ生まれ、一七二一年よりハレ、

ライプツヒ、シュトラスブルク、バーゼル大学で学び、最後の大学で一七一九年に博士論文 *De harmonia morum et morborum* で学位取得。その後オランダ内を学術旅行し、ダンチヒに戻って、ここで一七二五年にダンチヒ高等学校の医学と自然学の教員のポストを得た。一七四五年五月二九日死去。彼の著作の内で挙げられ得るのは

当時非常に人気があった *Anatomische Tabellen* ダンチヒ一七二二、一七二五、一七二八、アムステルダム一七三三、ライプツヒ一七四二、一七五九、アウグスブルク一七四五、一七六六、ローマー一七四八、ウトレヒト一七五五、カルル・ゴットロブ・キューンによる二七銅板画付 全面訂正版ライプツヒ一七八九、フランス語版アムステルダム一七三六。さらに *Elementa philosophiae naturalis, obserbationibus, necessariis experimentis et sanaratione suffulta. dfg. コーター一七二二、ゲッチンゲン一七二七、Diss. de vaporibus, nebula et nubibus* ダンチヒ一七二六、*De lapidibus* ダンチヒ一七二七。

これらに多数の、取るに足らない自然学と医学の論文が加わる。

これは日本語の医史学書のクルムスに関するすべての記載の主たる典拠となった記事と考えられる。

⑤ 『解体新書』のドイツ語版原著についての先行研究間の矛盾について

さて、『解体新書』のドイツ語版原著について、上記先行研究間で、矛盾した記載が見られる。すなわち、小川は一七三二年にアムステルダムで刊行された第三版であるとする(筆者もそれを踏襲した)のに対し、A.Hirsch編の医学者人名事典の記載の著書リストには、一七三二年のアムステルダム刊行版はなく、一七三三年のアムステルダム刊行版があげられている。

ここに今後解決すべき二点が存在する。

すなわち、ディクテンがライデンで翻訳・刊行した一七三四年のオランダ語版が、どのドイツ語版をもとに翻訳されたものかを、ドイツ語各版の原著をつきあわせて詳細に検討する必要がある。しばしばオランダ語に翻訳された医学書

には、その原著が明記されているが、デイクテンのオランダ語翻訳書にはその記載がない。

一八世紀にヨーロッパでベスト・セラーとなった医学書は、各地で色々な版が刊行されている。クルムスについても、今一度、ヨーロッパ各地の古医書を蔵している図書館を回り、著作目録を新規作成する必要がある。既に筆者は、日本の蘭学に大きな影響を与えたブレンクについて、ブレンクもまたクルムスと同様にヨーロッパ医学史では重要な人物ではないが、この作業を行い、拙著『緒方洪庵の蘭学』で公表した。同様の作業がクルムスでも必要なことは、今回の先行研究間の記載の矛盾から明らかになった。

四、ポーランドの文献から

クルムスがドイツ人であることは従来、明白な事実だと考えられていた。彼の史料のほとんどがドイツ系のものであったからである。

しかしクルムスの生きた一七世紀末から一八世紀半ばまではグダンスクはポーランドの自治都市であったと、少なくとも『ポーランド人名事典』¹⁾の編著者たちは考えている。

グダンスクは九八〇年頃に、ポーランドの最初の王、ミェシコ一世がこの地を制圧して生れた。²⁾一三〇八年にドイツ騎士団領に編入され、一三六一年にはハンザ同盟の都市となった。²⁾一四五四年にドイツ騎士団に対し反乱をおこし、ポーランド王に保護を求めた。一三年間の混乱の後、一四六六年にポーランドの自治都市となった。²⁾一七九三年、ポーランド第二次分割でプロシア領となった。²⁾

従ってクルムスの時代は、ポーランドの自治都市であった。一九七一年にワルシャワで刊行された『ポーランド人名事典』¹⁾にはクルムスはポーランド人として掲載されている。

前述した一八九六年にドイツで刊行された A. Hirsch 編の医学者人名事典 'Biographisches Lexikon des Hervor-

ragenden Aerzte Aller Zeiten und Völker'の内容(二章の④項参照。以後「前著」と略す)との比較を示す。A. Hirsch編の医学者人名事典に述べられていなかった部分を括弧内に明記した。『ポーランド人名事典』⁽¹⁾の記事はA. Hirsch編の医学者人名事典の内容より詳細である。

以下の記述は岡山大学経済学部助教授田口雅弘氏の和訳による。

クルムス・ヤン・アダム(ポーランド語読み、姓名順もポーランドの慣習に従った。Kulmus Jan Adam)は一六八九年三月二三日(前著、一八日)にヴロツワフで生れた。父はパン焼き職人のアダム(Adam)、母はマリア・フレゲル(Maria Flegel)、兄はヤン・イエジイ(Jan Jerzy)である(前著、記載なし)。

まずプロツワフのギムナジウムに通い、両親を亡くしたあと、一七〇四年に兄のいるグダンスクに転居し、そのギムナジウムに通った(前著、記載なし)。

一七一年にハレ、一七一四年にフランクフルト、次いでライプツヒ、シュトラースブルク、一七一五年(前著、九年、後述するように筆者も前著が誤っていることを指摘)にバーゼルにおいて'Dissertatio de harmonia morum et morborum'で医学博士号を取得した。⁽¹⁾その後、オランダのライデンでヘルマン・ブルーハーヴェの講義を聴講する。⁽¹⁾

一七二五年にグダンスク・ギムナジウムの教授、一七二九年に教え子たちの学術論文をまとめた'Fasciculus Exercitationum Physicarum de variis ac praecipuis rebus ad philosophiam naturalem'(『自然哲学各論集成』)を出版する。⁽¹⁾(一七二九年以下の内容は前著に記載なし)。同時に主に解剖学の分野で多くの小論文を著す(前著、記載なし)。

一七三〇年に二つの暦に関する書物'Curioser astronomischer und historischer Calendar'および'Nowy i Stary, to jest rzymski i rusuki kalendarz'(『新暦と旧暦すなわちローマ暦とロシア暦』)を著す(前著、記載なし)。

グダンスク市嘱託物理学者の公職を遂行する。皇帝博物学協会、ベルリン科学アカデミー会員(前著、記載なし)。

一七二二年四月一日に雑貨商クシシトフ・ロイシュネル(Krzysztof Leuschner)の未亡人、コンコルディア・エー

ベリング (Konkordia Ebeling) と結婚する(前著、記載なし)。

一七四五年五月二十九日にグダンスクで死去。

五、ダンチツヒのギムナジウムの歴史

今回、グダンスクなどで入手したダンチツヒのギムナジウムの歴史に関する事項を要約する。

ダンチツヒのギムナジウム (Gymnasium Academicum または Illustre Gedanense または Danticanum) は一五五八年の夏に市の参事会の決定により、一五五八年に創立された。

Winter Platz (現在名、Targ Maslany) 西のフランシスコ会の修道院 (Franziskaner-Kloster) の建物に同年から置かれた。⁽³⁾

なおこの建物は第二次世界大戦の空襲で大破したが、その後以前と同様の外観で再建され、現在も学校の校舎として利用されている。

このギムナジウムは四つの学部のためのアカデミックな教職の導入によって、ある人たちの意見によれば一五八〇年頃、他の人たちの意見によれば一六三〇年または一六四三年に、神学と哲学と法学と医学の講義がなされる学術的ギムナジウムの性格を得た。

最盛期は一六四三年から六八年で、平均して在學生徒数は四〇〇名、一部はバルト海沿岸とポーランドの出身者であった。一七一五年以後衰退した。⁽³⁾

ヨーハン・アーダム・クルムスはこのギムナジウムの学生で、その後教授に就任した。彼は自然科学、とくに解剖学の研究を彼の医師の仕事の基礎として行なった。

歴史家の一般的な意見では、一八世紀の最初の四半世紀にグダンスクの高等教育が衰退したという。この衰退は著明

で、彼らによると教員数と学生数が減少し、雄弁術と神学が好まれ、自然科学と数学が無視された。それは経済的、社会的、思想的理由による。⁽⁴⁾

しかしギムナジウムの何人かの教員の教訓的な出版活動を検討すると、高等教養教育を実施していたことが判る。

その第一はガブリエル・グロデック (Gabriel Grodeck) 教授 (一六九四年就任、彼の後継者ヨーハン・グローゼマイエル (Johann Glosemyer) 教授 (一七〇九年就任)、そして最強のヨーハン・アーダム・クルムス教授である。^{(3), (4)}

一七二五年に彼は教授に就任、そして二年後にイラスト入りの講義便覧を学生のために出版した。この便覧は記録の中にのみ知られる。この便覧の題名は公式には「科学的やり方、—観察、実験、そして常識について」で、科学の啓蒙の精神にのっとって説明している。⁽⁴⁾

一八世紀になつて哲学の教授のミヒヤエル・ハーノフが、この学術的ギムナジウムを総合大学に格上げするという提案をもつて登場した。しかし参事会はこの提案を拒否した。

その理由はこの高等学院はルター派のプロテスタント系であり、カトリックのポーランド王からの認可が期待出来なかつたからである。⁽³⁾

一七九三年にプロイセンがダンチツヒを占拠した。そして自治都市は存在を停止してしまった。

この時以来この学術的ギムナジウムは衰退した。一八一二年六月二九日の市参事会決定によつて、すべての学部の教授職が廃止されてしまった後に、市立ギムナジウムへの改組が一八一二年になされた。学籍簿はダンチツヒ市立ギムナジウムの所有下にあつた。⁽³⁾

六、クルムスの著作

表一は 'Jo. Adamus Kulmus 著' 'Fasciculus Exercitationum Physicarum de variis ac praecipuis rebus ad

表 1 分類番号 XIX 383 Jo. Adamus Kulmus 編著；'Fasciculus Exercitationum Physicarum de variis ac praecipuis rebus ad philosophiam naturalem (『自然哲学各論集成』)' Gedani (グダンスク) 1729 年刊の全タイトル

Curriculus I

- 1 de Natura corporum, eorumque affectionibus (人体)
- 2 de Corporibus Mundi totalibus in genere (天体)
- 3 de Sole (太陽)
- 4 de Luna (月)
- 5 de Planetis (惑星)
- 6 de Systemate planetarum (惑星の体系)
- 7 de Tellure in Genere (大地)
- 8 de Tempestatibus annuis (一年の天気)
- 9 de Aëre (空気)
- 10 de Ventis (風)
- 11 de Vaporibus, Nebula & Nubibus (水蒸気、霧および雲)
- 12 de Meteoris aqueis (液体)
- 13 de Meteoris ignitis (燃体)
- 14 de Meteoris emphaticis (気体)

Curriculus II

- 15 de Aquva & Maribus (水と海)
- 16 de Origine fontium (泉源)
- 17 de Aestu maris (満潮の海)
- 18 de Metallis (金属)
- 19 de Lapidibus (石)
- 20 de Magnete (磁石)
- 21 de Salibus (砂)
- 22 de Sulphure (硫黄)
- 23 de Succino (燃焼)
- 24 de Terrae-motibus (地震)

Curriculus III

- 25 de Plantis, earumque nutritione (植物)
 - 26 de Generatione & augmentatione plantarum (植物の発生と増殖)
 - 27 de Animalibus in genere (動物)
 - 28 de Digestione alimentorum (食物の消化)
 - 29 de Sanguine, ejusque Circulatione (血液循環)
 - 30 de Nutritione animalium (活力栄養)
 - 31 de Visu (視覚)
 - 32 de Audita (聴覚)
 - 33 de Gustu & Loqvella (味覚と発声)
 - 34 de Olfactu (嗅覚)
 - 35 de Tactu (触覚)
 - 36 de Somno & Vigiliis (睡眠と不眠)
 - 37 de Generatione Animalium (動物の発生)
 - 38 de Insectis (虫)
 - 39 de Vita & Morte (生と死)
-

philosophiam naturalem' (『自然哲学各論集成』(グダンスク 一七二九年)の全項のタイトルである。

これは今回、現地のポーランド・アカデミー・グダンスク図書館 (Biblioteka Gdanska PAN) で集録 (分類番号 XIX 383) したものである。

この本はそれぞれが数ページからなる発表年の異なるラテン語で書かれた三九編の小論文の集成であるが、特徴的なことは、各論文毎にその論文を提出した学生名が明記されていることである。どの論文にも指導者クルムスの名前が併記されている。

おそらく、ギムナジウム最終学年における卒業論文であろう。それぞれが個々に独立した論文であるので、この図書館の目録には個々の論文が一枚のカードに抜き書きされている。

これから一七三〇年代後半(文献四に拠る。実際は一七二〇年代後半)のグダンスクのギムナジウムで行なわれていた自然誌の教育のやり方がどのようなようであったのか明らかにする。¹⁾

クルムスの弟子の三二論文(文献四に拠る。実際は三九論文)のコレクションは、第一章は自然と天文への疑問に対する一般的問題の考察、第二章は生気のない自然に関して、第三章は植物と動物である。¹⁾

ポーランド・アカデミー・グダンスク図書館には、クルムスのラテン語で記述された医学博士号論文も蔵されている。それは 'Dissertatio Inauguralis Medica de Harmonia Morum et Morborum', 1715 22 Maji, Basiliae であり、すなわち一七一五年五月二二日にバーゼルでこの学位論文が刊行された。このことは当日バーゼル大学でクルムスの論文審査が行なわれたことを示す。

この医学博士号取得年月日は前述した小川の記載の年月日と異なっているが、こちらの方が正しいだろう。

これらの著作内容から言えることは、クルムスは単に内科学だけに興味を抱いていたのではなく、当時、自然哲学と呼ばれた自然科学全体を視野に入れ、ギムナジウム高学年の学生を教育していたことが判る。

七、今回入手した「故 Jo. Ad. クルムス博士の手稿からの抜粋」

今回、国立グダンスク公文書館 (Archivum Panstowe) の「故 Jo. Ad. クルムス博士の手稿からの抜粋」を入手した。ダンチツヒのギムナジウムの記録簿⁵⁾に挿入されていた六頁の書類である。

これはクルムスが自筆した書類をギムナジウムの職員が転記したものである。

記録のタイトルは「故 Jo. Ad. クルムス博士の手稿『医学博士にて正教授の J・A・クルムスにより、出来事の記録のために書かれた、一七二五年以降のダンチツヒ・ギムナジウムにおける特別な事柄の私的日誌』からの抜粋」であり、文中にしばしば「私、クルムス」と記されている。

一七二五年はクルムスがギムナジウムの教授に就任した年であり、彼の就任のいきさつからこの記録は始まる。ラテン語混じりのドイツ語で書かれた記録の複写を岡山大学文学部の高橋輝和教授に解読していただいた。

本誌九〇頁にこの史料を収載したが、その解読とその日本語への翻訳を示した。

それ以外にこの記録簿にはこのギムナジウムの医学自然学教授 (Professores Medicinae et Physices) 一覧が記録されており、これによるとクルムスの在任期間は一七二五年六月二七日から一七四五年五月三〇日(伝えられているクルムスの没年月日の翌日)である。

従って前述した小川の記載(「クルムスは没するまでギムナジウムの教授であったかどうか判らない」は訂正されなければならない)。

八、「故 Jo. Ad. クルムス博士の手稿からの抜粋」の要約と意義

クルムスは一七二五年五月二三日にダンチツヒ・ギムナジウムの医学と自然哲学の教授に任命され、六月二八日に就

任式が行なわれた。

ここでクルムスは「自然哲学と将来の自然科学との結合」についての講演を行ない、学長も講演を行なった。

この就任式では楽団長への謝礼の件で金銭上の小さなトラブルがあった。

七月六日にはクルムスは教授団に同僚として受け入れられ、教授会の秘密の維持、異なった意見の承認、ギムナジウムの発展と教授団メンバーの名譽の堅持などを誓った。

その後に一七二五年における最上学年、八・九年生とその下の六・七年生の授業時間割が示されている。

この時間割より当時のこのギムナジウムの教育内容がよく判り、重要な記載内容であると考えられる。

六人の教授が八・九年生のヘブライ学、ギリシア学、哲学、雄弁術、歴史学、法律学、神学、自然学、医学の授業を行なっている。六・七年生へはポーランド学、ヘブライ学、ギリシア学、修辞学、論理学、歴史学、神学、自然学の授業を行なっている。

クルムスはこの内、八・九年生へ医学（一コマ、ただし一コマは六〇分）、自然学（二コマ）、六・七年生へ自然学（一コマ）の授業を行い、医学のみならず自然科学全般を教えている。

前述したクルムスが指導し、学生が執筆した著作の専門分野からも医学を含む自然学全般を、彼が教育したことが判る。クルムスの教育した分野は物理学、地学、鉱物学、天文学、気象学、植物学、動物学、解剖学、発生学、生理学、感覚、内科学、薬物学などが含まれる。

クルムス以外の教員の授業科目から、このギムナジウムの高学年では大学の教養部レベルの学問が教えられ、このギムナジウムはその名称に *Academicum*、すなわち「学術的」が付けられていることから、普通のドイツのギムナジウムより水準が高かったと考えられる。

一八世紀に大学への昇格も提案されたが、宗教的理由から実現されなかった。

次いで定期試験の様子が述べられている。六・七年生への定期試験は八月二日（他の年の記載からも定期試験は毎年八月下旬に実施されていたようである）に行なわれた。

立会人として近辺の名士や知識人が招待された。口頭試問であったようである。立会人の招待手続きに関して小さなトラブルがあった。四・五年生、三年生、二年生への試験も同時に行なわれ、試験官名が記録されている。二年生へは計算とポーランド語の試験が行なわれた。

受験者数は四・五年生が六人、三年生が四人、二年生が五人と少数であった。

八月二三日に試験結果が発表され、七年生は三〇人、六年生は一五人が席替えした。

六年生の成績および素行不良の学生一名が除籍された。

八・九年生に進級出来る条件としては①年齢、②体格、③厚かましき、④怠惰があげられている。

一〇月一二日から国庫に関する会計担当者の改選があったが、前任者が会計記録をつけておらず、会計処理がずさんで不審な点があり、紛糾した。

学長は意見を書いた紙を箱に投票させ、各教員の意見を集めた後、一〇月二九日にクルムスが新しい会計担当者に任命された。

一二月一日に六・七年生の成績判定があった。この際、校舎の居住者たちは火元に注意するよう訓戒され、校舎への夜間巡察が再開された。

一七二六年に入り一人の学生が暴力で友人の眼に怪我をさせたので、一月二九日に教授団が召集され、学生牢入牢の処分が決定された。しかし加害者の学生が前例を引き合いに出し、処分過重を主張し、その学生の言い分が通った。

二月二八日には公開討論が開かれた。キーケプシュは空席の数学の教授職を目指してそれに参加したが、対立者の員外教授ハーナウが彼を非常に汚したので、キーケプシュの望みはかなえられなかった。

三月二八日に最上級生の度重なる盗みに関し教授団が召集された。すべての同級生たちはこの学生に対し敵対的となり一緒に通学したくないとして、この学生を講義中に講堂から放り出した。またこの学生を厳しく処分するようにとの要望書を教授たちに手渡した。

これに応じ、教授団はこの学生の父親を呼び出し、転校を勧め、この学生はハンブルクに移された。

八月二二日に試験と成績判定に欠席した学生が除籍になった。

また留年が決定した学生の一人が八月中旬に進級したいと申し出てきて、この件に関して教授間で討論があった。クルムスは教授団で一度決定されたことを、学生の意向で覆すことはおかしいと意見書を書き、結局この学生の要望は却下され、落第となった。

この史料により一七二五年のクルムスの教授就任当時の、八・九年生と六・七年生の授業の時間割が明らかになった。このギムナジウムは他のギムナジウムより程度が高く、現在の大学の教養部程度の水準の授業が行なわれていたことが判明した。また試験の様子も判った。

現在の大学運営とも共通点をもつ、一七二五年と二六年の学生をめぐるいくつかのトラブルの具体的な様子もよく判った。

九、考 察

本稿では、今回筆者がポーランドのグダンスクなどで発掘したクルムスに関する一次史料を紹介した。二章の先行研究の検討から判明するように、これらは従来、知られていなかった一次史料である。クルムスはヨーロッパの医学史、解剖学史において、重要な医学者でないため、彼に関する史料の発掘はヨーロッパの医史学者の研究に依存することはできない。

ここに彼に関していくつかの疑問が残る。それは、

- 一、クルムスはなぜ Anatomische Tabellen を執筆・刊行したのか。
- 二、クルムスはダンチツヒのギムナジウムで実際に人体解剖を行なったか。
- 三、クルムスは解剖学の授業を同校でどの程度行なっていたのか、Anatomische Tabellen をどのように教材として利用していたのかという問題である。

これらの問題は、今回発掘した史料に明記されていないので、筆者の見解を述べるにとどめておく。

一の問題であるが、クルムスが Anatomische Tabellen の初版をドイツ語で、刊行したのは、一七二二年にダンチツヒにおいてである。彼がギムナジウムの医学・自然学教授に任命されたのは、その三年後のことであり、このことから、当初はこの本はギムナジウム学生の教科書として執筆されたものではないことが判る。しかし一八世紀前半の当時には、大学の医学生、大学卒の内科医の公用語はラテン語であり、内科医のための医学書はすべてラテン語で執筆されていた。Anatomische Tabellen の初版がドイツ語で刊行されたことは、読者層をドイツ語しか読めない人たち、例えば外科医やギムナジウム学生に限定していたことを示唆している。

三年後の一七二五年にクルムスはギムナジウム教授に就任し、今回発掘した史料から判明するように、高学年の学生に医学と自然学の講義を行なっている。また、一七二九年には、クルムスの指導のもと、最終学年の各学生により執筆された卒業論文を一項として、編集された論文集『自然哲学各論集成』が刊行されているが、その内容は自然科学全体にわたる広汎なものである。その中に、人体、動物、食物の消化、血液循環、視覚、聴覚、味覚と発声、嗅覚、触角、動物の発声など、解剖学にかかわる内容も含まれている。

また、今回発掘した「故 Jo. Ad. クルムス博士の手稿からの抜粋」は、彼のギムナジウム教授就任の一七二五年とその翌年のギムナジウム生活に関する雑記であるが、そこには彼が人体解剖をしたという記載は見られない。

以上の点から二と三の問題を検討してみる。クルムスはギムナジウムにおいては人体解剖を行なわなかった可能性が大きい。この点については、当時人体解剖が実施されていたのは、オランダでは、大学の医学部の人体解剖、ギルド外科医を対象とした人体解剖、市民向けの公開人体解剖、そして解剖学者による自宅での人体解剖の四種だけであったという筆者の先行研究〔目で見えるオランダの解剖学講義―オランダに現存する二四枚の解剖学講義の画より〕『洋学資料による日本文化史の研究 VIII』一三〇―一八三頁、一九九五年、吉備洋学資料研究会刊がある。オランダでは、大学の予科的存在であったラテン学校やギムナジウムでは人体解剖は行なわれていなかった。従って、ダンチツヒでも同様であった可能性が強い。

クルムスは解剖学の授業を同校でどの程度行っていたのか、Anatomische Tabellenをどのように教材として利用していたのか、という点についても、史料に記載がないので、推測の域を出ないが、彼の医学講義では利用していたと考えられる。Anatomische Tabellenの解剖図は、特徴を強調した、初心者への教材としては適していた図であり、ギムナジウム学生への医学講義で利用されていただろう。また、最終学年学生の卒業論文の典拠史料としても、当然ながら、利用されていたと推定される。

以上、筆者の見解を述べた。

次に、一章の⑤項で、『解体新書』の原著となったのがAnatomische Tabellenのどのドイツ語版であったのか、Anatomische Tabellenの刊行版は全部でいくつあるのかといった基本的な事実が、今なお解決されていないことを指摘した。この点は今後、解決すべき問題であると考える。

史料の読解をしていた岡山大学文学部高橋輝和教授に感謝する。またポーランド語文献の読解をしていた岡山大学経済学部田口雅弘助教授にも感謝する。この論文の研究費の一部は平成十年～十三年度の文部省科学研究費（基盤研究C―一一〇六八〇〇〇九）を充てた。

文献おろひ註

- (1) 'Polski Słownik Biography' (『ポーランド人名事典』) Tom XV/2 Zeszyt 69, Wydawnictwo Polskiej Akademii Nauk, pp. 164-165, Warszawa, 1971. 『原註』 Eugeniusz Siehkowski の執筆。
- (2) E. Cieslak et al., 'History of Gdansk', Gdansk, 1995.
- (3) '400 Jahre des Städtischen Gymnasium Danzig', 1958.
- (4) Education at Gdansk during the Enlightenment period (an episode from the history of teaching natural science), 'Zeszyty Naukowe Wydziału Humanistycznego Uniwersytetu Gdańskieg', pp. 29-31, 1985.
- (5) Annalen des Danziger Gymnasiums aus sichern Urkunden gezogen und fortgesetzt von Carl Benedikt Consact, Prof. der Bereds. u. Dichk., (分類番号 340' 42/273) 一八世紀後半に製本と推定。

(新見公立短期大学)

A Study of J.A. Kulmus (1689–1745), the Author of “Anatomische Tabellen,” Translated into Japanese as “Kaitai-shinsho”

Sumio ISHIDA

Genpaku Sugita and Ryotaku Maeno published “Kaitai-shinsho (New book of Anatomy)” in 1774 in Edo (Tokyo). The original of this anatomy book was first published by Johann Adam Kulmus (1689–1745) in German in 1722 in Danzig. The third edition of this book (1732) was translated into Dutch and published in 1734 by Dutch surgeon G. Dichten in Leiden. “Kaitai-shinsho” was translated from this Dutch edition. The author visited Gdansk (Danzig) in Poland in 1996, and searched for documents of J.A. Kulmus at archives (Archiwum Panstowowe) and a library (Biblioteka Gdanska PAN). J.A. Kulmus was a professor at the Academy Gymnasium in Danzig which was established in 1558. He was appointed professor on 27th May 1725 and worked until his death. The author obtained “An extract of manuscripts of the late Dr J.A. Kulmus” at Archiwum Panstowowe. It consists of 6 pages manuscripts kept in “Annalen des Danziger Gymnasiums”. At first J.A. Kulmus himself wrote this document and then the officer of the gymnasium transcribed it after his death. This document showed the state of the gymnasium during the Kulmus days. Kulmus taught medicine for 8th and 9th year students and natural science for 6th and 7th year students. Also this document showed us the timetable of this gymnasium. The author also found the book titled “Fasciculus Exercitationum Physicarum de variis ac praecipuis rebus ad philosophiam naturalem,” edited by Kulmus in 1729. This book contains 39 articles written by his students.